

# 中国、反文革の方向も

## 衝撃的なクーデター説

中嶋嶺雄

中国の権力構造の中で党主席は、党、政、軍を統括する絶対的な地位であり、毛沢東主席の死去そのものが必然的に摩擦をもたらさざるを得ない状況だった。そのなかで、華国鋒氏は二月首相代行に、四月に第一副主席となってきたとはいえ、長い政治的なキャリアというより、中国の文革派と実務派の路線闘争の『妥協の産物』として浮かび上がってきたわけだ。これは、文革派にはやはりそれを支える社会的基盤がなかったことを裏付けるものだ。一方、華

派を打倒したといえるのではないか。文革派はやはり毛沢東あつての文革派だったということだろう。クーデター未遂のニュースは百パーセントは信じられないが、クーデター説が中国の外部世界で流されている時に華氏の主席就任が発表されたことは、クーデター説を間接的に確認したとも考えられる。なるようになったということだろうが、それにしても事態は余りにも衝撃的だ。

春橋氏の首相昇格が有力との見方が流れたが、その線はなさそうだ。そうだとすると、当分の間華氏が首相兼務ということも考えられるが、それでは『毛沢東』と『周恩来』を兼ねることになり、これも実際には続けることはむずかしい。そこで李先念副首相の首相昇格の線が出てくるが、李先念氏は実務派の長老であり、人望もあって有力といえよう。

クーデター説がもし本当ならかなりの事態だし、一方では反作用が起きないような手が打たれていくことになる。華国鋒氏

がこの試練を乗り切れば、中国は反文革、脱文革の方向へ向かうことになるだろう。もしそうだとすれば、鄧小平の復帰の可能性、さらにはソ連におけるスターリン批判のように、毛沢東批判の起こることもありうるかもしれない。

対外的には、ソ連は、これを機にいつそう対中工作を活発にするだろう。しかし、たからといって中国がすぐにソ連の方に向くことはなからう。一方、今いちばん戸惑っているのがアメリカだ。どちらかといえば毛沢東路線を評価していただけに、ソ連との関係から危機感をもっている。わが国は、この際、状況をじっくりみるのがよいのではないか。

(東京外語大助教授・談)

国鋒氏は実務派と連合して、文革

みないといえぬ。一時張